

2021年度「酪総研シンポジウム」をWEB開催 酪農現場のリスク管理を考えるⅡ～見えない敵から牧場を守る～

雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所 課長 下村 善計

雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所（戸邊誠司所長）は、2022年2月3日に2021年度「酪総研シンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムは、酪農乳業を巡る諸問題をテーマに取り上げ、情報共有を図るとともに、私どもの研究内容及び諸活動を多くの皆様にご理解頂き、その普及を図ることを目的に毎年開催しています。

2019年度から『酪農現場のリスク管理を考える』をシリーズテーマに掲げ、これ以降、「気候変動に備える」「暑熱」をサブテーマに実施。本年度は、第3弾として「見えない敵から牧場を守る」をサブテーマに3名の講師にご講演頂きました。

当初、実開催とリモートによる「ハイブリッド開催」を予定していましたが、2022年1月からオミクロン株による感染が急拡大したため、急遽「WEB開催」へ変更しました。皆様方にはご迷惑をおかけ致しましたが、例年と変わらず200名超の皆様にご参加頂き、誠にありがとうございました。

今回は、紙面をお借りし、3講演の要約をご紹介します。本シンポジウムの動画等を「酪総研ホームページ」に掲載していますので是非ご覧下さい。

【講演1】 「宮崎酪農からのメッセージ ～口蹄疫の脅威を伝える～」

宮崎県経済農業協同組合連合会
酪農飼料部

前部長 大村 賢太郎 氏

（大村氏は、2月1日付け㈱ミヤチク常務取締役ご就任）



2010年に宮崎県で発生した口蹄疫。宮崎県制作の記録ビデオを視聴後、発生状況や対応等をご説明頂きました。

4か月に及ぶ「見えないウイルスとの戦い」で、家畜297,808頭（うち乳牛2,500頭）の尊い命が犠牲となり、全頭ワクチン接種が実施されました。農家の方々

からの悲痛な叫びは止まず、心を蝕んでいきました。消毒体制を強化・徹底して口蹄疫の終息を迎え、その後、被災された酪農家51戸のうち37戸が経営を再開されました。

全国からの支援を受け、勇気とパワー、絆の大切さを実感されたとともに、宮崎では二度と発生させない強い決意を持ち、「忘れない そして前へ」を合言葉に、生産者・行政・JA及び関係団体が一丸となり、酪農・畜産の再生・復興、そして新生に向けて取組まれました。

防疫で大切なことは、「自分の牛は自分で守る」という意識そして「地域全体で取組む」ことです。また「毎月20日は県内一斉消毒の日」として取組まれています。

【講演2】 「牧場を守るワクチネーション最前線」

北海道ひがし農業共済組合

根室西部事業センター

診療2課診療課長

（獣医学博士） 加藤 肇 氏



多頭化や牛の移動の広域化、薬剤耐性菌の出現等によって、ワクチンによる感染症対策の重要性が一層高まっており、道東の現場での最新の取組みをご説明頂きました。

◆経鼻粘膜投与型ワクチンTSV[®]-3

子牛にカゼをひかせることは、繁殖効率の低下を招き、農場の生産性を著しく低下させます。子牛にカゼをひかせることによって、

- ① その後の死亡率が2.5倍に上昇
- ② 初産期に難産する確率が2.4倍に上昇
- ③ 初産乳期に病気で廃用になる率が1.84倍に増加。

子牛のカゼの原因の最大の病原体は、牛RSウイルスです。牛RSウイルスは、抗生物質が効果を示さな

いため、予防することが重要です。

従来の注射型の牛RSウイルスワクチンは、予防効果がありませんが、経鼻粘膜投与型ワクチンTSV®-3は、牛RSウイルス感染症の予防に極めて有効です。

◆牛サルモネラワクチン

近年、抗生物質の効かないサルモネラ菌（薬剤耐性サルモネラ菌）が発生する事例が多数報告されています。サルモネラ菌の特徴は、弾丸的な機動力で、リンパ節を通過して全身に入り込みます。

薬剤耐性菌発現を阻止するためには、サルモネラ症を抗生物質で治療するのではなく、ワクチンを使用して予防することが重要です。新しいサルモネラワクチンボビリスSは、安全性に優れ、サルモネラ症予防に有効です。

最後に、北海道ひがし農業共済組合様の取組みが、「ツイッター NOSAI道東」で発信されていると紹介がありましたので、以下にQRコードを掲載します。

「ツイッター-NOSAI 道東」
☆ 右のQRコードから検索。



【講演3】 「酪農現場での乳房炎の発生要因とその対策」

雪印種苗株式会社
事業本部トータルサポート室
岡本 武史 氏



乳房炎発症は、複数要因が絡んでいると考えられ、今回は「環境」、「乳牛の免疫」、「搾乳」に焦点をあて、現場事例とその対策をご説明頂きました。

◆「環境」要因の現場事例

1 例目は、牧場の「分娩後の乳房炎」が多い事例。

乾乳期間の体細胞数の動向を調べた結果、分娩した3頭に1頭は、体細胞数20万個/ml以上で分娩しており、そのうちの72%が乾乳期中に体細胞数が増加。また、月当たりの分娩頭数が増えると分娩後に高い体細胞数となる牛が増えていました。

そこで「過密防止」「敷料増加」「シールド材の使用」を実施しました。その結果、分娩後に高い体細胞数となる牛は減少しました。どのような場合に体細胞数が高くなるか調査し対処することが必要です。

◆「乳牛の免疫」要因の現場事例

2 例目は、TMRセンターの「サイレージの発酵品質が低下して、乳房炎等の疾病」が多い事例。

飼料分析を行った結果、自給飼料の20%近くが低品質で、それが給与される時期は、体細胞数20万個/ml以上の牛が増加していました。

そこで発酵品質改善のため、「水分調整」「サイレージ添加剤の適切使用」「踏圧密度の改善」を実施しました。その結果、Vスコアは改善され、体細胞数は減少（特に夏場の体細胞数の減少が顕著）しました。自給飼料の低品質の原因を突き詰め、それを改善することが必要です。

◆「搾乳」要因の現場事例

3 例目は、牧場の「搾乳手技のばらつき」の事例。

その改善を目的とした1回目の搾乳立会では、泌乳の立ち上がりが悪く、二峰性の泌乳曲線を見せる牛も確認。ミルカー装着のタイミングは、担当者によって大幅に異なっていました。

そこで「前搾りを強く5回に統一」「渋い牛も通常通り搾乳」を行いました。その結果、2か月後の搾乳立会では、搾乳時間は短縮し、体細胞数が減少しました。泌乳生理に沿った搾乳手技を実施しているかを確認し、問題点を従業員全員で共有し改善することが必要です。

乳房炎の発生要因は様々あり、それぞれ対処方法が異なります。どれが主たる要因となっているのか考え、対策を講じることが必要です。



2021年度酪総研シンポジウムの詳細（講演動画、講演資料及び総合討議）を「酪総研ホームページ」に掲載しています。

是非ご覧下さい。

☆ スマホは右のQRコードから。

☆ パソコンは「酪総研」で検索。

酪総研で

検索

